

氏名	北川 麻衣子
ヨミガナ	キタガワ マイコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第474号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 「黒」として保管される断片的記憶の劇場化 〈作品〉 最後のユニコーン 貉の森 間の森 語り部の詩

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	坂田 哲也
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	東谷 武美
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	齋藤 芽生

（論文内容の要旨）

本論文について

本論文は記憶を源泉として生み出される想像世界のモノクロームと、それが描き出す「黒」について考察するとともに、絵画が劇場という機能を持つことで得る表現を探ったものである。描く行為は想像の変幻自在性を絵として色と形に定着させることである。その過程で、想像の段階で思い描いた事物が、明確な輪郭を持たない曖昧なものであることに気がつく。それらに輪郭を与え、形を生み出すのが記憶である。私の描く想像世界は記憶によって作られている。絵のモチーフは、私の成長の過程で常に身近な存在であった動植物とそれにまつわる記憶である。これらの記憶では埋められない部分を埋めるのが記憶の断片である。適切な場面で想起し判断や行動に働きかけるのが記憶だとしたら、断片的記憶は、日常生活の中ではあまり使われない、パズルの余ったピースのようなものである。しかし、私に夢を見させ想像をさせるのが、断片的記憶である。この断片的記憶をコラージュのようにつなぐことが、具体的な事物として想像世界を描く手段となるのである。コラージュでつながれた事物に関連性は無いが、形を持ったそれぞれが画面上で隣り合うことで物語性が生まれる。絵の物語性は他者との共有を作り出す。物語性によって劇場化した画面は、伝える装置としての機能を持つのである。

私にとって、想像とはモノクロームである。第一章では、一節で想像や信仰によって姿や形を与えられた「黒」について考察し、二節で自身の初期作からの作例を挙げた。三節ではそれぞれの作家が作品に込めた「黒」について、マリオ・ジャコメッリとフランシスコ・ゴヤを挙げた。

第二章では、一節で、記憶を題材に、シュヴァンク・マイエルの映像作品とシルク・ドゥ・ソレイユの舞台作品を挙げ、記憶によって作り出される舞台について考察した。二節では、絵画の劇場性について、西洋の祭壇画、日本の地獄絵の「絵解き」と絵巻物を例に考察した。第三章は、提出作品について、自作を題材に本論論文で考察してきた事柄が自身の作品になるまでを記した。

第一章 「黒」として保管される断片的記憶

想像とはモノクロームであると述べた。モノクロームの中の「黒」は物質感と存在感を持ち、そこから想

像する事物が私の絵の世界観となっている。第一節「黒」を生むもので、私がくり返し描いてきた事物である「闇」「森」「間（はざま）」「異界」を挙げた。これらの事物を「黒」として捉えてきたのは、現実と想像が交差した記憶が生み出した事物であるからだという考えを基に考察した。第二節は、自身の過去作品を振り返りながら、「黒」を描く手段にダーマトグラフを選択した理由と、自身が描こうとした「黒」を、描かれた題材を解きながら考察した。第三節写し出された「黒」、描かれた「黒」では、マリオ・ジャコメッリ写真作品が写し出した「黒」と、フランシスコ・ゴヤが描き出した「黒」について考察した。

第二章 記憶が作り出す劇場

記憶によって組み立てられた情景は、自身の内的性質が働いた閉鎖的空間である。そこで繰り広げられる出来事は、自分の記憶を巡ることであり、また追体験と言える。その行為が、記憶という空間を劇場化することについて考察した。第一節、記憶が作り出す劇場では、ヤン・シュヴァンクマイエルがルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」を源泉に制作した長編作品「アリス」とシルクドゥ・ソレイユの「キダム」を基に、夢や想像が、人が自分自身と向き合うための「劇場」という機能を持つことについて考察した。第二節は、伝える装置として、劇場という機能を持った絵画を例に、伝えるという目的のために形を変える絵画について考察した。

第三章 提出作品について

提出作品をふり返るとともに、本論文で述べてきた事柄が、「黒」として想像世界のモノクロームを作り出し、「絵」という劇場機能を持つことで、伝える手段を得ることについて述べた。

おわりに

想像と想起は互いに重なり合っている。思い出す行為は、暗闇に目を凝らし、何かを見ようとする行為に似ている。想像と記憶の暗闇に目を凝らし描くことは、自分の内面世界の入り口に立つことである。想像とは、彼方に意識を飛ばすものではなく、自分の足跡を探す行為であり、私は絵を描くことで、自分が記憶の中に保管した足跡を探し出す事が出来るのだということを、本論文を書く中で知ることが出来た。

（論文審査結果の要旨）

筆者にとって記憶はモノクロームの世界だという。本論文は、記憶の断片を集めて再構成し、擬人化された動植物がくり広げる森の劇場を、ダーマトグラフのみでモノクロームの世界として描き出す、筆者の創作論を論述したものである。作品同様、論文もイメージ力の強い内容になっている。

筆者は小さい頃から動物を飼っており、本文中に出てくる劇団シルク・ド・ソレイユの公演なども好んで見ていたらしい。それらの断片的記憶が、触覚をともしなう動植物の質感描写や、森の劇場という情況設定につながっているのは明らかだが、北方ルネサンス絵画を想わせる濃密な幻想性は、筆者自身の神秘的体験に裏づけられているようだ。第1章では、^{はざま}黒として保管される断片的記憶が、筆者にとって物質感と存在感を伴うものであること、具体的には闇、森、間、異界のイメージにつながっていることを述べる。とくに幼少時、父にしばしば連れていかれた山での森の神秘性、突然現れた巨大なヤマミミズが、忘れられない記憶としてあるという。筆者がダーマトグラフを素材として選択したのも、やや粘性のあるその黒の感触が、筆者の記憶の質感・存在感とよく合っていたためらしい。第2章では、記憶がつくり出す劇場性について、シルク・ド・ソレイユの「キダム」、映画「不思議の国のアリス」などを例に、夢や想像が、自分自身と向き合うための「劇場」であることを確認。祭壇画や地獄絵といった宗教絵画も、同じ機能をもつとする。そして第3章で、今回の提出作品について解説している。

筆者が描く劇場には、高い描写力による現実感と、情況設定の幻想性が違和感なく同居する。記憶じたいが質感と存在感をもつためと思われるが、それが森の劇場なのも、内陸に生まれた筆者にとって、海は身近なものではなかったためらしい。また、個々の作品にストーリー性はあっても、作品全体に一貫したストー

リーがあるわけではないのは、断片の記憶が自在に集合していくためらしい。これについて審査会で、断片の記憶が劇場となっていく過程で、筆者自身の関与（役割）は、監督、脚本、役者、観衆のどれかという質問があった。それに対する筆者の答えが、断片の記憶が勝手に画面に定着していくのをただ見つめる、傍観者の立場に近いという答えだったことは、筆者のイメージ力を強く印象づけるものだった。

論文は明快な文体、構成で読みやすく、筆者の抱負なイメージを読者に十分に伝える説得力をもつものとして、審査員の高い評価が相次いだ。とくに質感をもつ記憶、ダーマトグラフという特殊な素材の選択、モノクローム一色の森の劇場など、独創性の高い筆者のイメージ世界を適確に説明していく論述力は、作品と同様に筆者の力とさらなる潜在力を感じさせた。優れた学位論文として、審査員一同の高い評価と承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

北川麻衣子は、驚く程多作な作家であり、膨大な数のボールペンによる描画で日常を過ごしてきた。スケッチブックや身のまわりにある紙すべてに描き続け、自己の存在証明の痕跡として紙の余白を埋め尽くしていた。夢の可視化を実現する為に、やがて必然として出会う、一つの独創的な表現方法をひたすら持ちながら、黙々と描き続けていた。また、モチーフとなる多種の動物たちを飼育し、常に触感を確かめつつ観察力を高めて、あらゆる生き物と共存するような生活を送っていた。

やがて、ある描画材を手にする事で闇と明、光と影からなる黒の世界を紙に定着させ、さまざまな物語を画面に展開していくことになる。リトグラフ（石版画）で使用する描画材料ダーマトグラフに出会うことになる。これは主にアルミ版（砂目状の表面となっている）の上に描くためのもので、油脂分の多い油性インクに近いものである。このダーマトグラフを初めて手にした北川は「Michael」十字架を持った大天使を、まるでずっと以前から慣れ親しんだ素材のごとく操り、美しい階調を作りあげていた。「黒を重ねるごとに現れてくる質感を拾い出し、そこから形を描き出して行く制作方法につながった作品である」と北川自身が語っていて、この後このダーマトグラフ1本を握りしめ、紙の上に不可思議な深い闇に潜む生きものたちのドラマが展開される。

この手法で完成された大作「間の森」「語り部の詩」「最後のユニコーン」「貉の森」の4部作は北川の博士課程三年間における集大成の作品となっている。闇の森に生きる不思議なドラマは、ヒロエムニス、ボッシュやピーテル、ブリュゲルの世界を思い出させるものであるが、北川自身の世界観が色濃く描かれ、確実に北川麻衣子の独自の世界が展開されている。森の中に、天国も地獄も混在し、現世のあらゆる生きものを同価値のものとして捉え、日の光の中では息を潜めているものたちが、闇の最中にいっせいに動めき出す。踊り出したり、激しい戦闘になったり、愛し合ったり、悲しみに涙に泣いていたり、さまざまな場面が混沌とした魅力のある場面を創り上げている。作者の醒めて見る夢の断片は、黒く集積する闇の中で、輝きに満ちて発光体と成って生き生きと描き出され、高い評価を得ている。

作者自身の生活の上で、いかに描くことに従事し、生きる実感を絵画表現に封じこめることを日常としているかが伝わってくる。北川麻衣子にとっては、夢が現実で有り描写することと表現者として生きることの覚悟が作品を通して感じさせてくれる。このことがあやうく絵空事に成ってしまいそうな主題を、醒めて見る夢の可視化として現実感を持って表現されている。新たな夢の推移の誕生を期待する。

（総合審査結果の要旨）

本論文及び作品の作者である北川麻衣子は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域の学生として第六研究室に所属している。本論文の主題にある「黒」として保管される断片的記憶の劇場化を様々な角度や作品で創作論を解明し、論述していったものである。油画研究領域という形式的な枠組みを越え、ケント紙という支持体を用い、わずか1色のダーマトグラフによって描かれた、四枚の連作からなる作品である。劇場性の強い作品によって表現されている。

北川麻衣子の本論文は「黒」として保管される断片的記憶の劇場化として、テーマを定め、幼少期から現

在までの不思議な体験的記憶を引き出しから一つ一つ取り上げるように集合させ、再構築して描き、自身の創作論という形式で論述したものである。博士課程研究作品四点として成立させた過程を、論文も作品もイメージ力の強い内容であり、拮抗しながら進む創作過程は、実に興味深く見応えがあった。

このような過程を経て書かれた論文は、明快さと参考文献が効果的に挿入されていて読みやすく、我々に十分な説得力をもって構成されている。第一章では黒として保管される断片的記憶として、「黒」を生むものとして、＜闇＞＜森＞＜間＞＜異界＞として論じられ、第二節では、ダーマトグラフの描画に辿り着いた自作「Michael」他、描いた黒について自作を語る。第三節ではマリオ・ジャコメックやゴヤなどの作家例に上げ、描かれた黒として論じる。第二章では、「記憶が作り出す劇場」として、映画、不思議な国のアリスや、シルク・ドゥ・ソレイユ「ギダム」を例として上げる。第三節では北川絵画の内容に触れる「絵画の劇場性」と祭壇画や、地獄絵、百鬼夜行絵巻などを参考文献として上げ論証する。第三章は、北川作品博士研究作品四点について、その論証や絵画観を、自身の体験や夢の断片としながらあぶり出す。

ダーマトグラフは本来、リトグラフの描画用に使われるのが通常であるが、北川はその観念をあっさりと超え、純白の厚手のケント紙に何層ものこの油性の黒色を塗り、擦り削ることによる積み重ねの加減で、独自の描画方を手に入れた。白のコスチュームが発光体のように見えるのも、紙そのものの白を生かし、森の奥の重厚な漆のような照りのある背景もこの技法によって、辿り着いた表現である。単にモノクローム作品とは言えない程、重厚で特異なマチュールを獲得したのだった。このような描画方によって描き貫かれた北川作品は、絶えず、作品を前にしての論文審査が常だった。

絵画の内容はと言えば、唯一の描画材料であるダーマトグラフのみで描かれたモノクロームの画面の中に、幼少期から蓄えた不思議な体験の断片を深い森の奥を劇場とした踊る人物や、原始的動物、あるいは、植物、花々を舞台のようにその姿を描いている。人や、原始動物たちや花々が、人物の踊りに共鳴するかのようにとりまき、ダンスするかのごとく描かれている。どの場面も日常にはありえない舞台設定であり、観ている側にめまいさえ覚えさせる。新しい表現と効果を引き出し、飽きさせない劇場的舞台を表出している。

描く前に下図は描かず、周到な技巧によるアプローチの中で直感により構図の決定がされていく。こうして瞬間的な物たちの登場が、自由な呼吸を呼び起こし、ダーマトグラフという武器を使って、最大限に発揮し、喜びをこめて描き出している。明快にして、白から黒へのグラデーションの階調も美しい。森の劇場で生物のための共鳴と讃歌を思わずにはいられない。作者としての生き生きとした画面を支配する姿が見えてくる。描かれた物たちのひとつひとつが生命感に溢れ、単なる「絵の中の絵」にはならない。

北川麻衣子は博士在籍期間の三年間を、実に有効に創作研究に力を注いだといつてよい。広いアトリエの床には削り取られたダーマトグラフの黒の粉が真黒くタイルを汚し、四方にダーマトグラフをほどいた巻紙が何層にも重なり残されていて、描く右手はペンキ職人かと思う程に黒く染まっていた。創作現場はまるで、描かれて行く作品と北川による格闘技場の様を呈していた。指導教員の私も、その創作現場の光景を目の当たりにした時、思わず絶句し、胸がつまった。

「間の森」「語り部の詩」「最後のユニコーン」「貉の守」は北川の渾身の集大成作品である。大学美術館の展示会場はさながら北川ワールドと化していた。論文主査である佐藤道信教授もその作品の持つ迫力と精緻な論証、的確な検証図版は読みやすい文章であるとその内容を高く評価され、作品主査の東谷武美教授、OJUN教授、齋藤芽生准教授の副査の審査員も、同じく評価された。

モノクロームでありながら、それを超えたマチュール、その劇場的で幻想性豊かな絵画は、課程博士の学位論文、作品に相当するものであるとされた。故に全員一致で合格と判定することにした。